

二〇〇〇年度 博士論文

『おくのほそ道』の本文研究

― 古典教育の視座から ―

(概要書)

早稲田大学大学院教育学研究科
教科教育学専攻

藤原 マリ子

目次

はじめに

三

第一部 『おくのほそ道』の本文研究

第一章 『おくのほそ道』の表記法―仮名遣いについて―

五

第二章 蕉風仮名遣いの考察

―『おくのほそ道』の諸本から『二十五条』の説まで―

八

第三章 『おくのほそ道』曾良本の補訂をめぐって

一〇

第四章 『おくのほそ道』のテキストに関する考察

―用字法からみた諸本・柿衛本の底本・『おくのほそ道』の定稿本―

一二

第二部 『おくのほそ道』と古典教育

第一章 中等教育国語教科書にみる『おくのほそ道』

一五

第二章 指導法の変遷にみる教材『おくのほそ道』

一七

第三章 教材『おくのほそ道』の本文表記に関する考察

一九

第四章 古典教育の意義に関する考察、教材・芭蕉作品の変遷

二〇

はじめに

本稿は、第Ⅰ部「『おくのほそ道』の本文研究」と第Ⅱ部「『おくのほそ道』と古典教育」より成る。第Ⅰ部には「おくのほそ道」の本文に内在する要素―表記・本文の表現・用字法―の分析を試みた論文をまとめ、第Ⅱ部には「おくのほそ道」の教材化に働いた外界の力―時代・社会・教育・文化・文学思潮等の外的要因―について検証し考察した論文をまとめている。

第Ⅰ部・第Ⅱ部の研究はともに、教材「おくのほそ道」の国語教科書における採録状況の調査の過程で生じた二つのテーマ―外在的要因と内在的要因の分析―をそれぞれ発展させたものである。副題を「古典教育の視座から」としたのはその謂である。

明治以来の中等教育国語教科書を調査していると、しばしば教材本文に少なからぬ改変が施されているのに気付く。「おくのほそ道」の格調ある文体を構築している漢文訓読調の表現や近世特有の語法が文語文法の規範に沿って改められていたり、「おくのほそ道」の原文が要約されていたりする現象がしばしば見られるのである。そうした本文の扱いは、古文が作文の模範とされていた昭和一二年までは殊に多く、戦後の教科書からはさすがに姿を消すのであるが、現在に至るまで原文の改変が通例となっているのが、仮名遣いである。

そこで「おくのほそ道」に内在する仮名遣いの実態、および、「おくのほそ道」の最善のテキストを求めて諸本の検証・考察を試みたのが第Ⅰ部である。

第一章では、仮名遣いの実態調査を実施し、従来、規範性に乏しいと考えられていた「おくのほそ道」の諸本（中尾本・曾良本・西村本）の仮名遣いに、定家仮名遣いに則った明確な規範が存在することを

明らかにした。第二章では、その結果をさらに蕉門の仮名遣いにまで広げて検証し、仮名遣いから蕉門の伝書『二十五条』の成立事情に照明を当てるとともに、蕉風仮名遣いの形成の一端について考察を試みた。第三章では、芭蕉の意図を最もよく反映していると考えられる「おくのほそ道」の重要なテキストの一つ・曾良本の性格を、補訂の仮名遣い・本文の表現の異同・筆蹟から検証し、曾良本の定位を試みた。第四章では、用字法の検討を加えて諸本の特質を改めて確認するとともに、現在いまだに詳らかではない柿衛本の底本について考察を加え、最後に、諸説が並立している「おくのほそ道」の定稿本について私見を述べて、第Ⅰ部のまとめとした。

一方、国語教科書における「おくのほそ道」の受容の実態を、「おくのほそ道」のカノン化と「俳聖・芭蕉」像の形成と関連させて、教育法規・教材史・教科書・教師用指導書・研究文献等の資料により分析、検証したのが、第Ⅱ部である。

近代の古典教育は、当初、日常生活のための文字言語教育として定位され、実用的使命を担って登場したのであるが、言文一致体が確立・普及するに及び、次第にその存在意義を失っていく。しかしやがて、文学趣味の養成、人格陶冶といった形而上の分野で新たな意義を獲得し、さらに戦争へと傾斜してゆく時代には、古典の持つ民族性・精神的感化力が国粹主義に利用されて、古典教育は民族主義的国民教育の重要な担い手として国語教育の中枢に据えられてゆく。

こうした時代の趨勢の中にあって、教材「おくのほそ道」はどのような教育的意義を付与され、どのような経緯を辿って中等教育国語教材として確固たる位置をしめるに至ったのかを、作品内容と時代背景との関わりを検証することにより明らかにしようと努めた。

第一章では、明治から現代に至る教材「おくのほそ道」の採録状況を検証し、その背景を分析した。

第二章では『おくのほそ道』の指導の実態を、教師用指導書や教科書・研究書を主な資料として指導内容と方法の両面から検証した。第三章は、第一部の本文研究の成果の一部を、現在の古典教育への提言というかたちで生かしたものである。第四章では、古典教育の意義を教育課程史や教材史の中で把握し教材『おくのほそ道』採録の背景にある国家の理念と教育制度との関わりについて具体的に論じた。

なお、書名の表記については、戦前から多く用いられている「奥の細道」、西村本・曾良本の題簽の表記「おくのほそ道」、中尾本の内題「おくの細道」の三通りが考えられるが、本稿では近年定着してきた「おくのほそ道」の表記を採用している。

第一部 『おくのほそ道』の本文研究

第一章 『おくのほそ道』の表記法―仮名遣いについて―

『おくのほそ道』の仮名遣いについて、その規範性の有無を論じた研究文献はこれまでのところ、殆ど見当たらない。それは近世が仮名遣いの混乱期と目され、『おくのほそ道』にも仮名遣いの規範があるとは考えられてこなかったことや、『おくのほそ道』の自筆本の所在が不明であり、直接に芭蕉の仮名遣いの意識を探ることが困難であったという事情による。しかし、芭蕉没後に刊行された旧仮名遣い（契沖仮名遣い）の規範書『和字正濫鈔』以前には、仮名遣いの規範として定家仮名遣いがあり、連歌書も定家仮名遣いの規範書である『仮名文字遣』に則って表記されていることが知られている。そこで、

芭蕉の自筆と見られる中尾本が平成八年に紹介されたのを機に、『おくのほそ道』の仮名遣いの実態調査を行った。中尾本の他、『おくのほそ道』のテキストの中で特に重要な曾良本と西村本について、定家仮名遣い（具体的には規範書の『仮名文字遣』）と旧仮名遣い（契沖仮名遣い）の双方からそれぞれの合致率を求めた。結果を記すと次の通りである。

① 異なり語数における合致率

旧仮名遣いとの比較

『仮名文字遣』との比較

中尾本	八四・〇 %	九五・六 %
曾良本	八二・四 %	九七・七 %
西村本	七六・五 %	九一・七 %

② 延べ語数における合致率

旧仮名遣いとの比較

『仮名文字遣』との比較

中尾本	八七・三 %	九七・二 %
曾良本	八七・五 %	九八・六 %
西村本	八三・七 %	九五・〇 %

③ 表掲載語数の概算による合致率

中尾本	八一・五 %	九一・〇 %
曾良本	八二・八 %	九五・三 %
西村本	七六・九 %	八八・九 %

すなわち、『おくのほそ道』の中尾本・曾良本・西村本の仮名遣いは、異なり語数・延べ語数・表掲

載語数のいずれの算定方法によっても、「仮名文字遣」の仮名遣いときわめて高い合致率を示し、「おくのほそ道」の諸本が「仮名文字遣」を規範とする定家仮名遣いに則って表記されていることが明らかになった。

この結果に基づき、中尾本・曾良本・西村本のそれぞれの仮名遣いの特徴および三書間の関係を探ってみると、以下のことが指摘される。

中尾本は、全体として「仮名文字遣」の仮名遣いに沿って表記されている。しかし、その一方で「すゆる」「をしゆ」などの当時定着していたと推察される近世語については、近世の活用のかたちがそのまま採用されている。曾良本は、仮名遣いから検証すれば中尾本のかなり忠実な写しである。それに「仮名文字遣」の仮名遣いに合致するようにさらに補訂が加えられている。その結果、異なり語数・延べ語数・表掲載語数のいずれの調査によっても、曾良本が「仮名文字遣」と最も高い合致率を示す。近年、曾良本を芭蕉の意図に最も近い最終稿本と位置づける説が有力になってきているが、右の結果は曾良本・最終稿本説を仮名遣いの面から裏付けるものである。西村本は、芭蕉が素龍に清書を依頼し、最後の旅にも持参したことから、従来、定稿本とされてきたものである。しかし、仮名遣いから見た西村本には、一部に素龍独自の仮名遣いの意識が見られ、中尾本や曾良本の仮名遣いとは異なる点が認められる。ただし全体としては、中尾本・曾良本と同様、「仮名文字遣」の仮名遣いに沿って表記されている。

また、中尾本が芭蕉の自筆であり、曾良本の補訂の最終訂正者が芭蕉であるとするなら、芭蕉は、連歌書にも用いられた伝統的な定家仮名遣いを尊重し、志向していたことが指摘される。その一方で、近世語についてはそのままこれを取り入れる柔軟な姿勢が認められる。「おくのほそ道」に見られる伝統尊重の精神や、辺地の文化の発掘を試み方言をも取り入れて新たな紀行文学を創造した芭蕉の自在な俳

諧精神を、仮名遣いにも認めることができるように思われる。

第二章 蕉風仮名遣いの考察

—『おくのほそ道』の諸本から『二十五条』の説まで—

本章では、以下の件について検証・考察を試みた。

- ① 中尾本・曾良本・西村本・柿衛本相互の関係の確認。
- ② 曾良本の補訂の仮名遣いの検証。
- ③ 芭蕉の門人・支考の仮名遣いの説の検討。
- ④ 蕉門の伝書『二十五条』の成立についての仮名遣いの面からの考察。
- ⑤ 蕉風仮名遣いの形成の一面についての検証。

西村本と同じく素龍の書写になるとされる柿衛本の仮名遣いには下二段動詞の活用語尾「へ」に関して、西村本と同じように「え」と書く傾向が一部に認められる。しかし、その数は西村本ほど多くはなく、定家仮名遣いとの合致率は曾良本に次いで高い数字を示す。西村本よりも定家仮名遣いに則った表記が用いられている。もっとも柿衛本には二葉の脱簡があり、その点で精確な比較は困難であるが。

また、曾良本で加えられている朱訂・墨訂について検証を試みた。その結果、曾良本における仮名遣いに関する補訂が西村本・柿衛本とともに踏襲されていない箇所が六例存在することから、朱訂・墨訂の仮名遣いの最終的点検・訂正者は素龍ではなく、芭蕉であることが指摘された（紙幅の関係から詳しい論証過程は割愛する。以下同様）。それでは、こうした芭蕉の仮名遣いに対する姿勢は、門人たちに

どのように継承されていたであろうか。仮名遣いについて最も多く言及している門人・支考の仮名遣いの説を取り上げ、検討を加えた。これまで、支考の俳論に仮名遣いの面から検討が加えられたことはないが、仮名遣いへの言及は支考の俳論の顕著な特徴の一つである。この支考の仮名遣いの説を「二十五条」の「仮名遣ひの事」の条に拠って、他の仮名遣書および支考の自筆本の仮名遣いや芭蕉の仮名遣いと比較してみると、以下のことが指摘される。

「仮名文字遣」および元禄年間を中心とする仮名遣い書・俳諧式目書・作法書、幕末の「俳諧仮名遣」との関連は薄いと判断される。また、支考の仮名遣いの説は全体的には定家仮名遣いに近いが、厳密には「仮名文字遣」を規範とする芭蕉の仮名遣いとも、支考自身の「東西夜話」の仮名遣いとも異なるものである。「三冊子」に「能書の物書けるには……書きざま見苦しき所は書き違へたる事多し」との芭蕉の言を伝えるが、支考は芭蕉の仮名遣いの要諦を、定家仮名遣いの厳守よりも字形を重視することと理解したのではあるまいか。支考著の「俳諧古今抄」に「仮名遣ひの畢竟は書法の字形」とあることがそれを裏付けているように思われる。

この支考の仮名遣いの説に拠って、蕉門の伝書「二十五条」の成立の事情を推し量れば次のような結論が導き出される。従来、「二十五条」は、①芭蕉が生前、自分で書いて去来に与えた書、②芭蕉に仮託した支考の偽作③芭蕉の遺語等に基づき構築した支考の作、の三通りに把握されてきた。しかし、①説は、「二十五条」の仮名遣いの説が芭蕉の実際の仮名遣いとは異なるものである点から承認しにくく、②説も「三冊子」の言と支考の言とに「字形重視」という点で共通点が見られるところから「偽作」とまでは決めつけがたい。結局、③説の、支考が芭蕉の遺語等によって自己流の仮名遣いの説を構築したとみる説が最も適切である。

また、美濃派で重んじられた『二十五条』の伝写の状況から、「蕉風仮名遣い」が形成されていた経緯の一端を窺い知ることができる。『二十五条』の「仮名遣ひの事」の条の諸本における異同状況からは、書写または版行に際して異同が少なく、且つ特徴的な表記は形容詞ウ音便を「ふ」と書く書法であることが指摘される。幕末の弘化四年に刊行された『俳諧仮名遣』（高井蘭山編）には、

俳諧仮名遣も蕉風に云翁の工夫とて建たる一法有て定格に交へ用る。・・うをふにかく一法ははせを翁の建てられ専らつかはれたる所也

とあり、支考の説いた形容詞ウ音便に関する仮名遣いが支考の俳論の浸透とともに、芭蕉の実際の仮名遣いとは無関係に「蕉風仮名遣い」として權威づけられ、広まっていたことが推測されるのである。

第三章 『おくのほそ道』曾良本の補訂をめぐる

『おくのほそ道』中尾本の紹介により新たに供された筆蹟資料をもとに、曾良本の書き入れについても平成一〇年に新説が提出された。従来支配的であった、曾良本の補訂は芭蕉の手になるものとの見解をくつがえし、「墨訂の文字の書き入れは、保留箇所および一例を除き全て素龍の筆になる」、「おくのほそ道」の完成に向けて素龍に対する添削の依頼が行われたのである」とする小林孔氏の説である。同説は、座の文学としての俳諧の共同制作的性格、さらには作者の無名性の問題が、『おくのほそ道』の場合にも成立するかどうかという非常に魅力的なテーマを孕むのであるが、果して、曾良本は素龍により添削・推敲され、墨訂は素龍により書き込みをされたものであるのか。問題を次の二点に絞り、検討を試みた。

一、行間に速筆で小さく書き込まれた墨訂の文字を、ほぼ全てが素龍の筆蹟であると断定できるか。

二、墨訂の文字が素龍であるとしても、墨訂が素龍の判断により行われたと判断できるか。

以上の二点を説明するために、仮名遣いと本文に関して曾良本において加えられた補訂が、西村本にも柿衛本にも踏襲されていない箇所を調査し、曾良本の添削を素龍が行ったと想定して、矛盾が生じないかどうかを検証した。論証過程については割愛するが、結果は以下の通りである。

A・仮名遣いに関する検討

曾良本において加えられた補訂が西村本にも柿衛本にも踏襲されていない箇所が六例みられる。仮名遣いを改めたのが素龍であるとするなら、素龍は自分で加えた訂正を西村本でも柿衛本でも踏襲していないことになり、きわめて不自然である。西村本や柿衛本に八行下二段活用の語尾「へ」を「え」と書く例が多いことに鑑みても、明確に「え」を否定し「へ」と訂正を加えているのは素龍ではなく、芭蕉であろうと推察される。筆蹟からも素龍と断定することは難しい。

B・本文に関する検討

曾良本において施された補訂が西村本にも柿衛本にも踏襲されていない箇所は四例である。この四例について筆蹟および異同の内容の両面から検証を試みた。その結果、曾良本の補訂を素龍の意図によるものと判断するのは難しいとの結論を得た。筆蹟からも、素龍筆と断定するのは難しいと判断される。将来、何らかの科学的方法によって筆蹟の一部が素龍によるということが明らかになったとしても、以上の箇所に関しては、推敲を加えているのは芭蕉であり、素龍はそれを筆写したことになるかと考える。

曾良本の最終点検・訂正者は、素龍ではなく芭蕉であると結論される。

第四章 『おくのほそ道』のテキストに関する考察

―用字法からみた諸本の関係・柿衛本の底本・『おくのほそ道』の定稿本―

本章では、これまでの『おくのほそ道』諸本の仮名遣い・本文の異同に関する調査に加え、新たに漢字・仮名の置き換え、漢字の字体の異同に関する調査を実施し、改めて諸本に関する総合的な把握を試みた。またそれらのデータを踏まえて、柿衛本の底本が何かという未決着の問題に関して考察をめぐらすとともに、『おくのほそ道』のテキストをどれに定めるべきかという定稿本の問題についても考察を加え、第I部のまとめとした。

① 漢字・仮名表記（用字法）の実態からみた諸本の性格

中尾本・曾良本・西村本・柿衛本の間で用字法（漢字⇄仮名、漢字の字体）に異同がみられる箇所を抜き出し、その箇所における中尾本と曾良本（初稿）、曾良本（訂正後）と西村本、曾良本（訂正後）と柿衛本、西村本と柿衛本との間におけるそれぞれの異同数を求めた。結果は次の通りである（漢字⇄仮名の表記の内訳、漢字の字体の異同状況に関する調査結果は割愛する）。

・中尾本・曾良本・西村本・柿衛本の間で、用字法の異同が見られる箇所・・・七三九箇所

・異同数 中尾本と曾良本（初稿） 四六

曾良本（訂正後）と西村本 三四四

曾良本（訂正後）と柿衛本 五九九

西村本と柿衛本 五八四

結果として以下のことが指摘される。

曾良本（初稿）は、漢字・仮名の書き分けから漢字の字体に至るまで、恣意を抑えた極めて忠実な態度で書写されている。曾良本（初稿）が中尾本の忠実な写しであることは仮名遣いや本文の表現の異同状況からもすでに指摘されてきたことであるが、用字法の異同状況からはそのことが一層明瞭になった。西村本では漢字と仮名との書き替え、漢字の字体の変更がかなり自由に行われている。しかし漢字表記は曾良本と同等もしくはそれ以上に多く、依頼された清書本であることを意識しつつ、かなり改まった態度で書写されたものであることが推測される。

柿衛本は非常に自由な用字法で書写されている。とくに曾良本や西村本で漢字で表記している箇所を仮名で表記するケースが目立つ。明らかな誤写と思われる箇所も多く、ラフな態度で、歌人・素龍の趣味をよく生かして書写された書といえることができる。

② 柿衛本の底本については、主に次の三通りの説が提出されている。

ア・曾良本を底本とする。初期の段階の補訂が施された後、書写されたもの。

イ・曾良本を底本とする。補訂終了後に書写されたもの。

ウ・西村本を底本とする。

ア説は、柿衛本の本文に曾良本の補訂前の初稿形態と一致する例があることから、柿衛本が曾良本の補訂の初期の段階で書写され、次いでさらに墨訂が加えられて西村本が書写されたと解するものである。該当する箇所を仮名遣い（九例）・本文の表現（一四例）・用字法（三例）に関するものに分類し、柿衛本が曾良本の初稿形態を書写した可能性の有無について検討した。その結果、柿衛本には曾良本との間に誤写や異同が多く（一四四例）、曾良本の初稿形態と一致する箇所のみを忠実に書写していると解するのは困難であるとの認識に達した。

また、イ説には、補訂終了後の曾良本を底本として西村本が先に書写され、次いで柿衛本が書写されたと解する説が該当する。イ説の最大の問題点は、西村本と柿衛本とは一致するが、曾良本とは一致しない本文の存在（一八例）をどのように解釈するかにある。そこで異同の内容に検討を加えたところ右記の一八例には西村本で意図的に改変され、柿衛本にも意図的に踏襲されたと考えられるケースがありあることが指摘された。仮名遣い・用字法の検討結果からも、イ説成立の可能性は高いと判断される。

ウ説についても同様に、仮名遣い・本文・用字法の各面から検討を加えた。結果として、柿衛本が西村本を書写したと解するには猶いくつかの問題点が残ることが指摘された。

結論として、柿衛本は補訂終了後の曾良本を底本として、西村本が書写された後に書写されたものと解する説（イ説）が最も適切であると判断される。

⑨ 「おくのほそ道」の定稿本については、曾良本説・西村本説が並立している。定稿本の資格を作ら・芭蕉の意図を最もよく反映した書に求めるならば、補訂に芭蕉の最終点検が加えられている曾良本が該当する。しかし、西村本説の中には、曾良本と西村本との間には未紹介の最終稿本が存在した筈であり、西村本における曾良本との異同は芭蕉の意図によるものであるとする説もある。そこで柿衛本における異同の内容を証左として、未紹介の最終稿本が存在する可能性の乏しいことを指摘した。したがって「おくのほそ道」の定稿本には曾良本が最も適切であると考えられる。

第Ⅱ部 『おくのほそ道』と古典教育

第一章 中等教育国語教科書にみる『おくのほそ道』

本章では明治以降の中等教育国語教科書における採録状況をたどり、『おくのほそ道』のカノン化の経緯の一端について考察を試みた。

① 『おくのほそ道』の採録状況とその背景

戦前の中学校教科書に『おくのほそ道』が初出するのは明治二八年で、明治三六年からは採録率が急増している。その時代背景としては、それまで漢文中心であった古典教育が明治二七年に国文教育へと転換されたこと、明治三六年前後は、日清戦争に勝利して日露戦争へと続く国威発揚の時期にあたり、国文教育への関心が高まった時期であること、等が挙げられる。

また、芭蕉受容史の上からは明治期以降は、芭蕉が単なる俳諧師から時代の文化をリードする文化人へと変容していった時期にあたる。芭蕉の作品は出版文化の発展と相俟って幅広い読者を得、普遍性を獲得していった。それに伴い研究書の数も上昇の一途をたどり、研究の進展が教材への採録を後押しする結果になっている。

『おくのほそ道』の戦前期における古文教育の役割については、教師用指導書の採択の趣旨によってア～エのように分類される。またそれらは教授要目の方針に照合するなら、次のa～cに該当する。

ア・文を作る上の一助。

—— a・実用的読み書き能力の育成。

イ・洗練された紀行文の妙を味わう。

—— b・文学趣味の養成。

ウ・生徒の詩情を養う。

—— b・文学趣味の養成。

エ・芭蕉の高邁な精神に触れさせる。

—— c・智徳の啓発・修養に資する。

教授要目に定められた古典教育の目的には、右記の a・b・c の他に「国民精神の涵養」といった項目もあり、それがやがて古典が国家主義鼓吹の手段としての役割を担う一因となっていくのであるが、「おくのほそ道」は終始一貫して、高邁な詩精神を有する文学教材として位置づけられている。そのことが多くの古典教材が消えていった戦時中も、戦後も採録されつづけた理由である。

② 各章段の採録状況とその背景

明治期の採録章段は、「序章」「旅立ち」「早加」の発端の章と、全編のクライマックスをなす「松島」「石の巻」「平泉」に集中している。ともに朗詠に適した「おくのほそ道」屈指の名文であり、格調高い和漢混淆文体が作文の模範ともされたことが採録の主な理由であると考えられる。

大正・昭和前期になると、「白河の関」「象潟」「立石寺」が新たに登場し、多彩な章段からの採録となって古典鑑賞指導の深まりを感じさせる。しかし、飄逸な味わいのある「等哉」、遊女との邂逅と別れを描く「市振」等は全く採られておらず、「心情を高雅ならしむるに足るものたるべし」との教授要目に沿った内容となっている点に、戦前の古典教育の限界を見ることができる。

一方、戦後においては「立石寺」が急増し、「松島」「象潟」が激減、「市振」「大垣」が新たに顔を出している。古典の必修単位数の減少に伴い章段の種類は限定される傾向にあるが、名勝地中心の教材編成から、各章段の多彩な内容・文体に焦点を当てた編成への転換をみることができる。

③ 教材本文の採録状況

戦前期の教科書には、底本を改変して採録しているケースがかなり多く見られる。例えば、「おくのほそ道」の冒頭が「元禄二年、奥羽長途の行脚思ひたちて・・・」と始まっていたり、「おくのほそ道」のタイトルのもとに芭蕉の他の作品が混入していたり、文語文法の規範によって格調高い漢文訓読調の

文体が平板な表現に改められていたり、近世特有の語法が訂正されていたりする事例がしばしば見受けられる。その背景には原典に対する杜撰な姿勢や、昭和一二年まで古文が作文の模範とされていたという事情がある。戦後の教科書においてはさすがにこうした大幅な改変は見られなくなるのであるが、仮名遣いについては今日でも旧仮名遣いに則って改変されるのが通例となっている。この件に関しては、第三章で改めて取り上げる。

第二章 指導法の変遷にみる教材「おくのほそ道」

「おくのほそ道」の指導の実態を、中等教育国語教科書および教師用指導書を主な資料として、①構成、②表現、③内容に分類し、教材指導の内容・方法の両面から検証を試みた。さらに④として教科書の編纂形態からみた教材の扱いについても分析を試みた。

① 戦前期において「おくのほそ道」の作品構成について言及した教科書・指導書は岩波の「国語」を除くと殆ど見られない。構成論への言及の乏しさはこの分野に関する戦前の研究の乏しさを反映するものである。それに比し、戦後の作品把握においては構成論の充実が目ざましい。戦前から存在した序破急説の他、連句的構成説や三角形の構図説等が紹介され、冒頭と末尾の章段のシンメトリーに注意を促すものも多い。戦後の「学習の手引き」等の課題には、句文の融合や章段の構想について問うものが多くなっている。

② 戦前期の指導書では、古文が作文の模範とされていたこともあり、表現に着目した指導が多い。「おくのほそ道」の俳文体の特徴として挙げられている項目には次のようなものがある。

・簡潔で省略の多い文体　・散文というより一篇の詩である。　・独特のリズム・メロディーを持つ。
・感動のままに記した主観的文体　・修辞技巧の豊かさ　・古典の教養を背景にした表現
さらに文法的破格・欠陥も指摘されている。これらの指摘は戦後もほとんど変わらないが、戦前期と異なるのは俳文体の特色を聴覚的に捉え、音読・朗読・暗誦を指導の目標に掲げるものが増えていることである。修辞技巧に注目させ、表現効果を尋ねる課題も多い。

③ 戦前の指導書には、作品の主人公である芭蕉の生き方や人生観に言及するものが多い。作品を通して芭蕉の人物像に着目させ、その感化によって「修養に資し」「心情を高雅ならしむる」(教授要目)ことを目指す指導方法は戦前の古典鑑賞指導を特徴づけるものの一つである。芭蕉の人物像は、人格者・求道者・隠遁者・人情家として、理想化されたかたちで把握されている。俳聖・芭蕉像の浸透に、教科書が大きな役割を果たしていることが如実に窺える。大正期に「寂しい人」と捉える見解もみられるのは、明らかに大正ロマンティズムの影響である。戦後はこうした感化主義的教訓姿勢は希薄になり、芭蕉をわれわれと同じ土壤に置き、より表現に密着した形で作品へのアプローチを図ろうとする姿勢が見られる。

④ 教科書における教材の排列の仕方については、戦前は雑纂型、戦後は単元型と一般に称されている。しかし、戦前の教科書の編纂に一定の体系があったことはいくつかの教科書の編集方針でも明らかである。戦前の「おくのほそ道」をめぐる教材の排列の仕方には、俳諧や俳文と組み合わせるもの、旅、自然と文学、風雅等をテーマとするもの、芭蕉の人と作品とを組み合わせるもの等があり、周到な編集方針のもとに有機的に関連づけられ、排列されている。それに対して戦後の単元構成は、文学ジャンル、時代、古典等のタイトルによってまとめた至極あっさりとしたものである。学習への興味・関心を喚起

するという観点からは、戦前の工夫に富んだ教材排列には参考にすべき点が多い。

第三章 教材『おくのほそ道』の本文表記に関する考察

古文教材は本文の採録に当たり、旧仮名遣いに統一、変更されるのが明治以来、現在に至るまでの通例である。旧仮名遣いは明治五年の学制公布当初から政府により採用され、以来、昭和二年に現代仮名遣いに変更されるまで、日常の表記として一般に用いられてきた。明治から昭和二年までは、古文は現代文とともに作文の模範としての役割を担っていたから、本文が旧仮名遣いに改変されるのみならず、中古の文献を規範とする文法によっても、合致するように変更されることが屢々であった。しかし旧仮名遣いは、元禄八年に刊行された契沖の『和字正濫鈔』に基づいており、その規範とする仮名遣いは源氏物語以前の文献に拠るものである。したがって、時代的に隔たる近世の作品には仮名遣いにおいても語法においても、旧仮名遣いや中古を規範とする文法にあてはまらない場合が少なくない。元禄七年に完成した『おくのほそ道』においても、旧仮名遣いや規範文法に合致しない箇所がかなりあり、これらは従来、誤謬・混用として訂正されてきた。そこで、明治以来の中等国語教科書における『おくのほそ道』の本文表記改変の実態調査を行い、教材『おくのほそ道』の本文表記のあり方について考察を試みた。実施した調査内容は次の通りである。

①戦前の中等国語教科書における本文表記改変の実態調査、②戦後の高等学校教科書における本文表記の改変状況、③『おくのほそ道』の仮名遣いの実態調査

戦前における本文の改変状況については第一章で触れたので省き、戦後の教科書における改変の例を

挙げると、例えば発端の章では「すゆる」「すうる」(「すゆる」が近世語法)、「むつまじき」「むつまじき」、「そゝく」「そゝぐ」(濁音が近世の読み)の両様の表記が認められる。また、仮名遣いに関してはどの教科書においても一律に旧仮名遣いへと改変されている。

しかし「おくのほそ道」に、定家仮名遣い(具体的には「仮名文字遣」)に則った規範があることは第一章で記した通りである。とすれば、教材化に際して原文に内在する仮名遣いの規範を無視してそれらを一律に別種の仮名遣いである旧仮名遣いに改変することの当否が、今後問われなければならないであらう。

戦後の古典教育の重要な目的の一つである「言語感覚の錬磨」という視点からも、検討を加えられる必要がある。現代とは異なる時代の異なることばに触れることが言語感覚をみがき、学習者の手持ちのことばの土壌を豊かに育むとすれば、多様で異質なことばのリズムや表記法・表現形式に触れることが、ことばの深さと厚みを体得させることにつながる。また、ことばの変化を如実に映し出した近世の語法や仮名遣いに直接触れさせることは、ことばの変化を実感させ、ことばの歴史やことば自体への興味・関心を喚起させる上でも有益であらう。「おくのほそ道」の鑑賞の上からも、連歌書に継承された定家以来の伝統的な仮名遣いに拠りつつも、近世において定着していた語はそのまま採用する芭蕉の自在な仮名遣いに接することは、芭蕉の俳諧精神の在り様をより深く感得する上で意義がある。

戦前と異なり、古文が作文の手本としての意味を失った今日、独自の規範を有する「おくのほそ道」の仮名遣いに直接触れさせることの意義が改めて検討されてよいのではないかと考える所以である。

第四章 古典教育の意義に関する考察、教材・芭蕉作品の変遷

本章では「古典」（カノン）形成の一翼を担ってきた近代の古典教育の歴史的役割と国語教育的意義について考察を試みる。また古文教材の変遷をたどることによりいかなる作品が「古典」として選ばられ、わが国のカノンを形成してきたかについても考察する。なかでも芭蕉関連教材の変遷を通して、芭蕉に関する神話形成のプロセスの一端を探る。

① 戦前期における古典教育の意義

戦前期における古典教育の意義は、次のように把握される。

ア・日常の表現手段としての実用的意義。

イ・文学趣味の養成。

ウ・人格陶冶・教養に資する。

エ・国民精神の涵養・国体の闡明。国家主義・国粹主義の手段。

近代の古典（古文）教育は、日常の読み書きのための文字言語教育として実用的な役割を担って登場した。近代化を推進し、国家の独立・富強を図るためには教育の普及が急務であり、そのためには日常の読み書きに適した文体を完成させることが何よりも肝要であった。古文教育もその一つの試みとして、主に歌文の文章として教授された。しかし、より実用に適した通俗平易な文語文（普通文・時文とも）が工夫され、さらに近代的自我の発見に貢献することになる言文一致体が確立、普及するに及び、実用としての古文は使命を終え、存在意義を失っていった。実用的意義を喪失した分、古文は文学趣味の養成や教養・修養に資するといった人格陶冶の面で、すなわち形而上的分野で新たな意義を獲得して再登場する。やがて大正デモクラシーのもとで教養主義・文学教育思潮が開花し、古典の鑑賞指導は独自の深まりを見せていったが、一方、民族の遺産としての古典が有する民族性・歴史性、言語芸術としての

古典が持つ精神的感化力が、国民道德の形成や国民意識の統一に利用され、国家主義的国民教育の担い手としての役割も重みを増していった。太平洋戦争に突入するに至り、言語作品としての古典が本来有する意義や価値は顧みられなくなり、古典教育は専ら国体の本義闡明の素材、皇国民思想普及の手段として位置づけられていった。

② 戦後期における古典教育の意義

戦前・戦時中にかけて国粹主義・国家主義に利用された古典教育は、戦後、真理と平和を希求する民主主義教育のもとで、大きく方向を転換することになる。戦後の古典教育の歴史は、古典の価値そのものを問いなおすところから始まったといえる。GHQによる軍国・国家主義や神道に関連した教材の排除指令と、戦前・戦中の古典教育への苦い反省に基づき、敗戦直後の古典教育は、文学趣味の養成にまづ活路を見いだした。戦後の古典教育は、文学教育の一角に位置づけられることによって、漸く命脈を保った観がある。

しかしこうした古典の扱いへの批判は、戦後まもなく起こっている。時枝誠記氏の古典教育論や荒木繁氏の古典による民族教育の主張がそれである。一方、戦後確立した「言語の教育としての国語教育」の中に古典教育をいかに位置づけるかが、戦後の古典教育の一貫した課題であった。古典単元学習の試みや、経験を重視する生活主義の欠点を補う形で提唱された能力主義の動きの中での読解力養成の目標設定などは、言語教育の中に古典教育の定位を図るものであった。その一方で、実用性偏重の言語技能教育への批判から、人間性の育成を重視する文学教育の思潮が復活し、古典教育にも強い影響を与えている。鑑賞力・批判力の養成や心情を豊かにすることを古典教育の目標として掲げるのは古典教育を文学教育の視点から捉えたものといえる。西尾実氏や益田勝実氏による「現代語を育む古典文学」の指摘

は、こうした「文学としての古典」教育と言語教育とを結びつける積極的な試みであった。ことばの芸術である古典のことばが、現在使用している我々のことばを豊かにし、洗練されたものにするとの主張である。昭和三五年以来、学習指導要領の古典の目標に登場した「言語感覚の錬磨」も根底において同様の発想といえる。

最近では急激な社会変化に適応できる人間の育成を図るとの趣旨から、古典教育に新たな光が当てられつつある。国際理解や生涯学習といった新たな観点からの古典教育の意義の把握がそれである。

③ 教材・芭蕉作品の変遷

芭蕉作品の教材化の実態としては、主に以下のこと指摘される。

- ・明治期における多彩な俳文の採録（奥の細道・十八楼の記・座右の銘・嵐蘭が誅等）
 - ・戦前期における作者および作品解説の頻出（俳聖芭蕉・旅人芭蕉・芭蕉さま・芭蕉の研究・花屋日記）
 - ・昭和戦前期～戦後にかけての「幻住庵記」の増加
 - ・戦後期における俳論の進出（三冊子・去来抄・柴門の辞・笈の小文等）
- 戦前・戦後の芭蕉作品の教材化が、芭蕉の神格化を一部の俳句愛好家の間だけではなく、広く国民の間におし進めていった実態をみることができる。